

律宗戒学院蔵『記録法蔵』解題と翻刻

阿部美香

袋綴装一帖。全二十五丁。縦二三・七糎、横一七・一糎。二十二丁目に、折紙二紙が挿入されている。表紙は共紙。表紙見返下に、本文の一部を四字目の途中まで書写した跡が残っていることから、反古紙を利用したものであると知れる。表紙左上に「記録法蔵」と外題が墨書で打付され、その下に単郭円形陽刻黒印が捺されている。中央下に外題と同筆で「唐招提寺尊榮」と本書所持者名が記されている。また、表紙右肩には「文参拾七」「宗室」、右下に「20862」と印捺された蔵書票、同右上には「記録部」と記入された蔵書票が貼付されている。本書は現在、律宗戒学院所蔵文書となっている（通番00385・紺箱3―4）。

本書には、二十二丁目表に「于時文明六年（一四七四）甲午七月廿一日、於招提西二室寫」、二十五丁目裏に「于時文明六年甲午七月廿五日、於二室寫之」という書写年紀がある。その後ろに続けて「興禪院焼失。文明八年丙午五月十七日（マツ）牛剋ハカリ焼出。同沙弥堂、類火ニ遇日中ノ行道七仏畧戒之時分火出。應永三年（一三九六）五月七日大地震佛閣僧坊悉破滅也」との追記があるが、全体は文明六年七月の書写と見てよい。裏表紙見返には、唐招提寺第八十世長老北川智衆師の識語があり、本書の伝領の経緯を知ることができる。

本文は、智衆師識語を除き、すべて一筆で記されている。ただし、本書に挿入されている折紙は別筆で、その

奥書識語には、「招提寺教朝、現光寺光瑞別受ノ堂達スル時是事也。年預沙汰人とも、□執ノ僧ハ廿ハク也」と記されている。折紙は、受戒、あるいは別受（三聚淨戒のうち摂律儀戒を受けること）の次第書と見られ、唐招提寺で実際に用いられた記録資料として、本書中に挿入されたものと推察される。

本書は、外題に「記録法蔵」と記されるように、種々の記録、例えば受戒・自恣・受日に関する経文の抄出、また律宗の祖師南山道宣の伝記や戒牒、唐招提寺の草創や仏像の造営、仏事に関する覚書など、唐招提寺および戒律に関して特に重要と思われる記録を抄出した抄物である。

本書は、本文一丁目冒頭に「業疏^一下」とあり、「記云」「資持上四云」「五分云」「四分^二ハ」と抄出が続いてのち、「師弟事」として、その箇条題のもとに律宗関係の經典の抄出がなされていて、冒頭の抄物も、何らか箇条題のもとに抄出されたものと考えられるから、首部を欠いているように見える。しかし、本書中には箇条題を付さない抄出が他にもあるので、首部を欠いたように見えて、初めから現状の書写形態の書であったかもしれな

い。

本書の全体の構成を目録化して示せば、以下のようである（箇条題が無いものについては、括弧を付けて私に事書した）。

- 一、（不詳。説戒に関する抄か）
- 二、師弟事
- 三、持戒事
- 四、犯戒事
- 五、戒功事
- 六、戒功事
- 七、南都叡山戒勝劣事「笠置上人御草」
- 八、南山大師御事「瓊鑑章第六在之」
- 九、（唐招提寺草創と、和尚入滅の事）
- 十、天台戒牒
- 十一、招提寺別受戒牒
- 十二、（唐招提寺の草創、堂や仏像の造営、仏事などについての覚書）
- 十三、（不詳。説戒に関する抄か）
- 十四、自恣事

十五、受日志趣

十六、唐招提寺八所御靈秘事

十七、興福寺僧綱大法師等誠惶誠悲謹言

これらのうち、一（箇条題不詳）、二「師弟事」、五・六「戒功事」、十三（箇条題不詳）、十四「自恣事」、十五「受日志趣」は、それぞれ経文からの抄出によって構成されたものである。箇条題不詳の二つの抄物は、本文中に「説戒」「羯磨」の文字が見られることから、説戒などに関する抄物かとも思われるが、不明である。これに対し、七「南都叡山戒勝劣事」、八「南山大師御事」、十「天台戒牒」、十一「招提寺別受戒牒」は、十七「興福寺僧綱大法師等誠惶誠悲謹言」は、既存の記録を聚めたものといえる。これらの記録と同文の書が、いずれも大日本仏教全書に翻刻されており、その対照を示せば、次のようである。

七「南都叡山戒勝劣事」は、笠置上人貞慶草『南都叡

山戒勝劣事』（二巻）として収録。

八「南山大師御事」は、東大寺沙門凝然述『律宗瓊鑑

章』（六十巻）巻第六に収録された南山大師の伝に

該当。

十「天台戒牒」は『南都叡山戒勝劣事』に加えて収録。

十一「招提寺別受戒牒」は『南都叡山戒勝劣事』に加

えて収録。

十七「興福寺僧綱大法師等誠惶誠悲謹言」は、『興福

寺大法師長寛元年奏状』（二巻）として収録。

右の『南都叡山戒勝劣事』、『律宗瓊鑑章』巻第六については日本大蔵経にも収録されている。大日本仏教全書所収『南都叡山戒勝劣事』によれば、唐招提寺本の奥書に「（略）元禄十年（一六九七）夏之初寫之以好本可考之也。唐招提寺能満院義蓮。安政三年丙辰七月朔日書寫之。同八月廿八日以當寺尊榮書寫之古本一校了。彌勒院法住本常」とある。また『興福寺大法師長寛元年奏状』の奥書には「本云于時文明六年甲午七月廿五日於二室寫之。安政三年丙辰八月廿八日書寫之。法住本常」とあり、これら二書について唐招提寺彌勒院本常が、安政三年（一八五六）に尊榮の古本または文明六年の写本を写写したという経緯が知られ、それは尊永識語を付した文明六年写本であるこの『記録法蔵』に拠ったものであるう。

このように、『記録法蔵』は、唐招提寺において重要

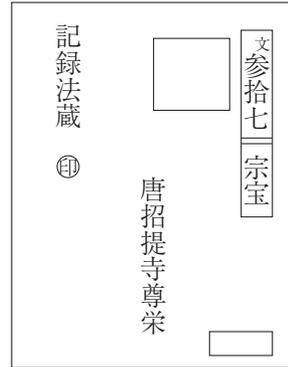
と思われる記録類を、尊栄が修学のために書写したものであると考へ得る。本書の一部はすでに『奈良六大寺大観第十二巻、唐招提寺一』に紹介されているが、本書は唐招提寺における修学や書写活動の一端を伝える資料として貴重なものであり、ここに改めてその全文を翻刻紹介することとしたい。

〔初出〕

昭和女子大学律苑文化研究会編『律苑墨寶』第一輯（二〇〇〇年一月）所収「律宗戒学院蔵『記録法蔵』解題と翻刻」。本稿はこれを一部訂して再録したものである。

凡例

- 一、でき得る限り底本の姿を伝えるように、段落、改行は底本通りとし、文字の大小にも配慮した。
- 一、略字体は通行の文字に改め、旧字体は可能な限りそのままとし、明らかな誤字は右傍に（ママ）と付し、衍字も同じく（衍カ）と付した。脱字については、これを訂正しなかった。
- 一、虫食いは、□で示し、見セケチ・抹消の指示ある文字は、その指示に従った。また、補入の指示ある文字は、指示に従って本文に組み入れ、文字の傍に「・」を付した。
- 一、朱筆の文字は「」で括り、墨書との別を示した。なお、朱書の符号等はこれを省略した。
- 一、編集上の制限により、文章が一行に収まり切らない場合は次行に続け、改行符号を示した。
- 一、改頁ごとに、丁数とその表裏を示した。折紙は、その上・下段を示した。



唐招提寺尊栄

記録法蔵

業疏云下廣張網自用収惡縁怨漏天綱ニ

方便ツクラシ為非ヲ及論得魚ヲ實一目ナリ

記云張網取魚ヲ得一目ニ教制被物ニ犯ハ止一端ナリ

以テ喩テ頭ヲ法ヲ業云下如佛說法何慮ヲ不知レ猶

言ハリ諦聽々々善思念之下

此則勸ム詳シヤウシ審アキラム重說善哉ニ明順法ニ重言ノ

如是ハ述セリ即定ニ大聖尚爾況下凡乎文

回云能持無患但是集因有患不持終歸魔

業ヲ此勉ハケマシテ持者ヲ更マシク如勝進スヘシ文

三捻香カウ者供三宝也唄匿ハ止断ト反又云止息ニ

請說戒師維那云大德慈悲為僧說戒ト云ヘシ

「表紙

々々「表紙見返

說戒師答云此說戒事正當我作ト云ヘシ

說戒師前後詞句

小比丘某甲稽首和南敬白衆僧々々差誦律

恐有錯誤願同誦者指授文

小比丘某甲致敬衆僧足下敬謝衆僧々々差誦

律三業不勤多有忘失願僧慈悲施以歡喜文

說戒師四面礼僧已互跪白言布薩時ナリ

資持上四云明簡衆シユ不唯沙弥或ハ尼ノ三衆俗士

瞻礼セン並須遣出○不知法但遣沙弥ヒヤウ白衣叢

聽シ雜穢同聞ス深ク乖法律極成輕易悲夫文

并受屬受人壽此与欲人ノ壽ノ事ナリ

次行沙弥籌ト云ヘシ此ハ沙弥ノ籌ヲ引時ノ事ナリ

五分云籌ノ極短ハ並ヘ五指ヲ極長ハ拳一肘極麤ハ

不過小指ニ極細ハ不得減箸ハシニ文

四分ニ舍羅ニハ云籌

師弟事 師資相攝篇云

事鈔上云佛法增益廣大ナルコトマコトニ寔ニ由師徒相攝ニ互

敦遇シテ財法兩濟ウヘシヒ、ニ日積テ業深ク行久シテ徳因コト者皆

頼ヨレリ斯文又云問云何ヲ名師和尚闍梨

答此ニ無止翻善見云知故是我闍梨ナリ

「2オ

「2ウ

「1オ

「1ウ

論傳云和尚ト者外国ヲ語此ニハ云知有罪ト是名見論

和尚法顯傳 ○明了論ニハ正本ニハ云優婆陀訶翻シテ為依

學ト依テ此人學スルカ 戒定惠 故相傳シテ云和尚ヲ為力生ト 「3オ

道力由成ル闍梨ヲ為正行ト能ク斜正ス弟子行 文

弟子ト者學在リ我後ヘ名テ之為弟 從我 生ス名之

為弟 文 阿遮利耶唐ニハ翻教授ト文

事鈔上三云時ニ有三時 從十二月十六日至四月

十五日 為春ト從四月十六日至八月十五日 為夏ナリ

從八月十六日至十二月十五日 為冬 文

增一阿含開ス七反捨戒コトヲ過ハ此 非法ナリ十誦伽論ニ

尼ハ無捨戒シテ 更得受具 文 準ニ義 應得作コトヲ下ノ二衆ト 「3ウ

資持二三云僧伽摩比丘七反降ス魔 後更受

具シテ得阿羅漢カン 因ニ開七反 已外不聽 ○女流ハ報

弱クシテ 無シ志操 佛初ニ許マフ度 尚是曲開ゼウ 何況再受ニ文

三代者真殷周也夏ハ建寅為正殷ハ以丑月為正

周ハ以子ノ月為正 文

義疏云摩訶陀国此ニハ云不害 人雖犯罪 無刑ニ

殺誅 故云不害 文

義疏云王舎大城外国ニハ云羅悅祇摩訶伽羅ト

此翻云王舎大城ト羅悅祇此ハ反為王舎ト摩訶云大口 「4オ

伽羅云城 十六国及大城而此城最大故稱王舎

大城 善見毘婆娑云其城縱廣三百由旬有八億

万戸 其属王舎城者有八万聚落也

義疏云耆闍崛山此云鷲頭山也佛滅度後

阿育王見其山頂似鷲 使人鑿作兩翅兩足及

尾故金如鷲鳥 城山相去凡十五里文

義疏第一云阿菟者翻為如意 亦云無貧 過去

一食施辟支佛 十五劫天上人中受於福樂 最後得

羅漢 常得如意 無有貧窮 甘露飯王之子也 「4ウ

持戒事 義疏第一云憍梵波提者此云牛呵 無量壽經云

牛王 過去世曾作比丘 施陀粟田邊 摘トテ一莖粟 觀

其生熟ス數粒墮地 五百世作牛 償之イマ今值尺迦

得道足甲似牛 食後猶呵シカム 因為名 佛恐咲之

得罪 徒置マカ切利天戸利沙樹下 即舍利弗上

足弟子解律並於優婆離佛滅度後於天上

般涅槃也 犯戒事

義疏第一云畢凌伽婆蹉者此云餘習 亦言惡口 經曰

佛在時其人除佛 以下一切比丘皆稱鄉汝乃 「5オ

至罵恒河水神佛因誠之カ自今以後勿作鄉

汝之言以向尊長 憶佛語故遂更改之 其五百

世作婆羅門故有此慢習也 戒功事

義疏第一云薄俱羅者此云善容 持一不殺戒

得五百死報 一釜煮不死 二熬盤不焦 三水不瀾

四魚腹不爛 五刀刃不復 經云出家以來八十歲眼

不視女人面不入尼寺 亦不為女人說於一偈 阿育

王歷諸塔 供養多有布施至薄俱羅塔聞其

在世少欲知足不為女人說一偈乃以一錢施之塔

遂不受文 戒功事

義疏第一婆沙云帝尺慳甘露飯 嫉修羅美

女 修羅慳美女嫉帝尺甘露飯也

事鈔上一云測思明惠シテ冥會ス前ノ法ニ以此要期之

心 語彼ノ妙法 相應スレ於テ彼ノ法ノ上ニ有緣起之義領

納シテ在ク心 名為戒鉢ト文

涅槃云欲見佛性證大涅槃必須深心修持淨戒文

花嚴云戒是無上菩提本歟應堂具足持淨戒若能ナウ

堅持於禁戒則是如來所讚歎文

地持云三十三相無差別因皆由持戒所得若不持戒

尚不得下賤人身況復大人相報文

〔6オ

資持上云佛本無身全是積功修成功德之聚還以

已德開樂群生故名為戒當知此戒即是如來故之

若我在世無異此也文

古迹云信為入法之本戒為住法之原文

又云六道衆生但解師語要須先發大菩提心謂

誓定取無常菩提窮未來際利樂有情文

莊嚴論云雖恒處地獄不障大菩提若起自利心

是大菩提障文

本業經引云一切菩薩凡聖戒盡心為躰是故心

盡戒亦盡心無盡故戒亦無盡心謂期心若不

放捨無盡戒願無有盡コトク 犯無邊戒故由此轉生

戒亦恒隨運々增長乃至成佛猶如河水月夜

不停運々遷流自到大海文

古迹云何故諸佛蓮花為座表佛雖在世如不着水文

南都叡山戒勝劣事笠置上人御草

夫尋戒根源ラ凡於菩薩所修六波羅密ニ戒波羅

密ノ中ニ有二種ノ不同一者攝律儀戒謂正ツ遠離ス

所應離ノ法ラ二者攝善法戒謂正ツ修證應修證

法ラ三者饒益有情戒謂正ツ利樂一切有情ラ其中

第一律儀戒者聲聞菩薩大乘小乘共ニ受ル戒也

〔7オ

以此律儀戒或ハ名具足戒ト戒ハ名比丘戒ト故方成大

小ノ比丘僧故雖菩薩ト先受比丘戒ヲ即列ナリ一比丘衆ニ

其上ニ可受菩薩戒也若菩提不受比丘戒ヲ者是應非比丘

衆哉若菩薩ノ受比丘戒名テ為シ菩薩比丘衆ト若聲明人

受ハ比丘戒名テ為聲明ノ比丘衆ト凡以出家ノ形ヲ名僧

宝ト即名比丘僧ト設雖菩薩ナリト不受比丘戒ヲ非比丘僧ニ

者属在家人ニ誰云出家僧哉故云菩提僧云聲

門僧ト云凡夫僧是受比丘戒故ニ立僧宝

名ヲ也而南都具足戒者即菩薩三品戒波羅密

中ノ律儀戒是名比丘戒ト叡山僧侶迷テ戒品ニ不

受南都比丘戒ヲ既以テ非比丘僧可属在家人ニ爰

以不空ニ藏ハ年至十三ニ雖受菩提戒ヲ後ニ受ク比

丘戒ヲ鑿真和尚ハ十八歲雖受菩提戒ヲ後廿一時受

具足戒ヲ聖武天皇請行基菩薩ヲ雖受菩薩戒後ニ

從鑿真受比丘戒ヲ若南都ノ具足戒為聲明小乘

戒者不空ニ藏鑿真和尚聖武天皇豈捨大乘ヲ

趣小乘ニ哉知南都具足者非一向小乘戒ニ云事凡東

大寺戒壇者月氏震旦日域三国共許之法式也

聖武天王以天平勝宝六年五月六日於東大寺ニ

可立戒壇之由被下綸言ヲ之刻ミ大唐終南山ノ道宣

「8オ

律師ノ付法ノ弟子滿州融濟律師ノ同資青龍寺

鑿真和尚并中天竺曇無讖三藏弟子揚

州白塔寺ノ沙門法進此二人和上奉勅宣ヲ中納言

藤原朝臣高房ハ為行事ノ勅使 仍鑿真

法進二人ノ和上勅使相共位ニ任テ圖ニ令建立

東大寺戒壇院被寄ニ一ケイ十〇国ヲ天平勝宝六年ニ

被造始 至于同七年ニ速疾ニ二箇年ノ内ニ被造畢

大唐終南山ノ道宣律師移天竺ニ之戒壇ヲ鑿真

即任テ終山山之戒壇ニ立南都戒壇ヲ畢法進又同ク

傳印土之風儀ニ書戒壇之圖ヲ畢ヌ非和州ニ始ケル

戒壇ニ月氏震旦之舊風也於東大寺具足戒

誰可生疑網ヲ乎

夫尋大唐終南山之戒壇ヲ者道宣律師任テ印土

之風ニ欲建戒壇ヲ時忽ニ一人聖人自然ニ化現シテ示其戒壇

之方法ヲ而道宣不信之處ニ沙弥

來テ求彼上人ヲ其時道宣律師問テ沙弥ニ曰聖人誰人

哉沙弥答云聖人是賓頭盧尊者也此時道宣律

師始生カ聖信ヲ任聖人告ニ堀地下至水際四角ニ各

有一堅石 高六尺也件石上ニ有銘 此是迦葉佛時ノ

「9オ

比丘ノ戒壇場ナリ号清官寺ノ戒壇ト云々而今東大寺戒

壇偏ニ寫彼ノ儀式ヲ實ニ非同唯尺迦一佛之月氏

之戒壇兼写久遠迦葉之法式 夫南都者依大唐

天竺之舊儀ニ任前佛後佛之遺跡ニ登壇受戒

之法式以南都戒壇 可為本 也今延曆寺戒壇者出最

澄之新儀 不見尺尊之正說 於印土之中ニ者依何所圖

至四至之間ニ寫何国壇ヲ哉爰以昔弘仁ノ聖朝御時

延曆寺最澄叡山ニ可建戒壇ヲ之由雖經官奏ヲ諸寺

僧侶不許 故ニ天判更ニ不成 最澄終不遂素懷没畢

後延曆寺別當国道朝臣何賢政漸ク隱之刻ヲ得佛法

衰微之比ヲ重テ曆テ奏聞ヲ蒙勅許ヲ之後義真為

立叡山之戒壇ヲ謁南都戒壇第九和上常詮僧

都ニ乞請東大寺戒壇四角土ヲ籠テ叡岳戒壇ニ

令建立道場ヲ畢ヌ其傳義真教請文即在東大寺

爰知ヌ以南都為本戒壇ト以叡山 為末戒壇ト云事何

況最澄者興福寺ノ所司仁秀寺主之門弟於正

倉院ニ受具足戒ヲ之後大安寺ニ其後登テ叡

山 可立叡山之由經官奏之處也次傳義真教者

興福寺東金堂衆延修之童子童名即糸

牛丸又慈覺者於東大寺戒壇院 受比丘戒 既於

〔10〕

叡山戒壇ニ仰傳戒之祖師ト最澄義真等皆以南

都ノ門流也争可誹謗出家具足之大戒 乎凡ソ以

菩薩十重戒冊八輕ヲ為出家大僧ノ戒ト事更無聖

教之所說 梵網瓔珞全無ッ其說 善戒地持ニ都

無彼文 菩薩戒者三界五趣出家在家通受之戒也

若以此戒 為ハ出家戒者欲天色天之衆龍神鬼神之類

奴婢畜生之於皆以可為大僧ト哉故以延曆寺戒

壇ヲ為出家之戒之条甚以無聖教誠說 只為功

德成就 雖授菩薩戒品 不可為出家受戒之作

法 者也而延曆寺僧侶迷戒相 以菩薩戒ヲ用出家

之條暗テ聖教之所說 更迷戒相 故也知延曆寺

僧侶非比丘 而着比丘之衣ヲ非大僧ニ而居大僧

之位ニ豈非不知戒律之作法 哉以叡山戒壇 可

為末戒 云事道理已ニ必然也天台門葉歸伏シテ

戒律之根源ニ勿起コトハ諍論ヲ矣

南山大師御事瓊鑑章第六在之

高祖傳ハ道宣天機英敏 達悟利貞ナリ隋ノ大

業十一年乙亥年滿二十當日本国人王第三

十四代 推古天皇御宇二十三年從首律師ニ

〔11〕

受ク具足戒ヲ大唐武徳年中ヨリ從テ首聽ク律ヲ一

十遍兼テ通經論ヲ博ク研ク大小内外縁括シ真俗該貫セリ

行高ク安明ヨリ徳濟滄溟ヨリモ應ヘシ坐ヲ五濁ニ紹ワケ迹四依ニ

五部連ヌ暉ヲ反テ光ヌ九代ヲ作テ鈔三卷ヲ映奪古

今ヲ製疏兩部ヲ匡正是非ヲ義鈔尼鈔僧尼

兼テ濟冥證理妙語妙窮シテ幽邃ヲ護法興福

周盡シテ無シ遺靈威秀テ千古ニ住持盛ナリ于万代ニ

贊集觀儀傳疏鈔凡二百余卷匠作多端ナリ

弘通弥廣ナリ玄奘翻ニ經ヲ乃預ル譯場ニ梵僧

号シテ為ス真大菩薩ト智首律師判ス五部衢ヲ弘

通草創未通廣泊テ南山大師秉持之世日本競馳

通方ニ昌ニ弘曇摩ノ戒宗遂時ヲ廣布シ法正ノ律門

待テ縁ヲ方ニ開ク斯乃大師律主秉御之力量也

大師律ハ則專ラ奉リ四分ヲ論ハ則成ト攝トニ二宗經ハ

是法花涅槃判ハ是三觀教宗惣シテ提ク八万之

宏綱ヲ別居一宗之極位ニ兼正弘通寔ニ有リ

由乾封二年丁卯十月三日安座シテ而卒ス當日本国人

王三十九代天智天皇御宇六年丁卯春秋七十二

僧臘五十二

唐招提寺草創 天平宝字三年己貞治

五年丙午マテ六百八年無作者無誰造作故名テ

無作

和尚御入滅者天平宝字七年癸卯御年七十六

貞治丙午五年マテハ六百三年

天台戒牒

比叡山延曆寺戒壇院

奉請靈山淨土

釋迦牟尼如来為 和尚

奉請金色世界

文殊師利菩薩為羯磨阿闍梨

奉請觀史多天

彌勒菩薩為 教授阿闍梨

奉請十方一切世界

一切諸佛為 尊證

奉請十方一切世界

一切菩薩為 同學等侶

奉請當寺

大德律師為 傳授戒師

沙弥 秋首和南 大德足下

竊以無明長夜戒光為炬滅後木刃為師所以

「11」
一行
料紙
挿入

「12」

賊傳比丘釋敷草繫於王遊乞食沙門頭鵝珠

於死後故三觀佛乘結三身於究竟三種淨戒

〔13才

開三因於初發但宿因多幸得愚勝緣值愚敷棄

妄尋真精析戒品庶夫無上佛種藉此敷

榮塵勞稠林因茲殄滅敷今契嘉元二年四月八日

於比叡山延曆寺大乘戒壇院受菩薩別

解脱戒伏願慈悲拔濟謹和南疏

奉請 嘉元二年四月八日沙弥智觀謹疏

比丘今蒙悲濟秉授淨戒納法在心福河流

住伏乞現前傳戒和上幸垂藥名永為戒驗注敷

現前傳戒和上座主前大僧正都維那法眼和尚位

上座法印和尚位 寺主法眼和尚位

〔13才

招提寺別受戒牒

奉請

唐招提寺大德慶円律師 計

奉請

唐招提寺大德覺融律師 計

奉請

龍門寺大德照海律師 計

奉請

崇福寺大德實盛律師 計

奉請

常寶寺大德覺秀律師 計

奉請

唐招提寺大德玄智律師 計

奉請

遍照心院大德性海律師 計

奉請

來迎院大德妙海律師 計

奉請

極樂寺大德禪智律師 計

奉請

淨蓮花院大德尋惠律師 □計

沙弥道海稽首和南 大德足下

竊以三學殊途必會通於漏盡ヲ五乘ノ廣運ウシ

資戒足 以為先 是以表戒務衆行之津梁

願無願心祈七支之勝躅但道海宿因多

幸得籙マシフルコト 法門ニ未登清禁 夙夜リツノ尅悚 今契

建武元年十月三日於唐招提寺戒壇院受

具足戒伏願大德慈悲戡濟少識和南謹疏

〔14才

建武元年十月三日 沙弥道海

和上 傳燈大法師位慶圓

戒壇堂達

傳燈大法師位重海

此戒牒ハ道海之別受之戒牒也

鑒真和尚御來朝 天平勝寶六年

唐招提寺建立 天平寶字二年

唐招提寺諸堂修理并佛菩薩開眼事

金堂供養事

文永七年庚午四月六日舞樂千僧供等并千手開眼道師實想上人 咒願圓律上人

次講堂供養建治元年乙亥十一月十四日五日兩日

四分說戒實想上人 羯磨圓律上人 答法理性房

唄空印房 梵網說戒中道上人 梵唄動聖房

維那良覺房 行事梵賢房 良忍房 聖意房

了月房 五德仙宗房

同十四日夜於礼堂舍利講一座實想上人

伽陀良忍房聖意房廻向(光家寺僧)性觀房

次金堂葉師佛供養 弘安五年壬午三月八日

導師理性房光臺寺長老僧衆三百余人

次講堂弥勒供養 正應壬辰九月十二日

導師良觀上人僧衆四百余人尼衆二百余人

〔15才

次金堂尺迦佛供養 永仁二年甲午八月十四日

導師慈道上人咒願證達上人院三寶千僧供千帖袈裟引之

次弥勒堂弥勒院工移事 永仁元年癸巳正月引之造營之

一東僧坊造營 弘安六年癸未自正月始之

并礼堂同 同七年甲申成之畢

一戒壇興行 弘安七年甲申九月十四日五六三夕日受戒

一舞臺始造之 弘安八年乙酉五月日

一僧厠造營 弘安十年丁亥四月日

一牟尼藏院造營 正應元年戊子自正月始之四月功成了

一湯屋造營 正應四年卯辛四月中成了同五月一日湯屋有之始奉

一御影堂造營 乾元々々寅自三月十四日始之

同年七月七日上棟在之壇厨子塗事者延慶二年金賜同年

一九月念佛八箇日初中後三願文讀之諷誦文

過去帳者每日讀之中日遺教經講之

一精進供事

初日松林院 第二日大乘院

第三日竹林院 第八日西南院

一千燈會事 初日大乘院第五日東大寺東門院

一精進供下行事 初日結願者樂所 第二日庫院

第三日舍利頭二人 第四日承仕 第五日加用 第六日供僧 第七日加用

〔15才

〔16才

〔17才

一千燈會臺廿脚一脚ニ五十燈宛都合千燈也

一第六日參人ニ朝粥引之東門院沙汰

一承仕二人ニ各二斗五升作事舛定下行之

一火燃一斗五升作事舛定下行之

一講堂修理 建治元年正月より始之同年十一月

一供養本ハ正面ニ左右ニ柱二本在之修理之時取之畢

一如意輪タラニ始行正和三年自正月七日七箇日夜

一供養法在之正和六年ヨリ闕如畢

一服寺念佛應量上人御始行自寛元々年至

元應二年都合七十八年本者三月自三月

十八日在之春念佛依指合四月ニ延引之

一解脱上人秋念佛御始行建仁三年癸亥自

九月十九日至元應二年百十八年

一諸院家結番 承久二年九月十九日

一諸寺知足坊勸進事正元々年自九月至

元應二年六十一年

一解脱上人御入滅建曆三年二月三日乃至元應

二年百八年建保元年ニアタル

解脱上人者念佛ハ十年御結縁ケツエン

一應量上人自誓受戒自嘉禎二年至元應

二年八十五年

一鋒立逆修弘長三年九月一日圓律上人御母儀入滅同年

一正法寺結界逆修事建長元年巳三月晦日

結界自四月二日尺迦念佛始行之

一應量上人通十二御年ハ五十七圓律上人通十夏

時ハ御年三十

一正法寺最初長老信如房

一嵯峨大念佛始行弘安二年三月六日ヨリ始行

縁覺上人勸進

一法金剛院僧寺成事弘安五年縁覺上人開山カイ

業疏ニ云法不孤建成必在縁事文下釈云然法

起依人故文同疏云斷除穉穉ハイ增長嘉苗文

穉音啼稗傍卦及田中穢草同云阿含經云

聞聲 止苦 者凡業ニ有定與不定 故苦有止與

不止ト若シ作業必定スレハ 聖シ所不免不定業云 無縁 則チ受ク

有レ縁便止ム 罪者遇ラ 善 為シ 因ト 打者設マウクルラ 願 為縁ト

故ニ得聲ヲ傳シテ 苦ヲ滅スルコトヲ 自然ノ感應ナリ 文

抑汝等如陳說 受南浮衆上之人身

遇西天優曇之教法 誠是億劫難遇之勝縁

生死解脱之大慶也雖然依年齡諸縁不具

「17」

「18」

「18」

未無受無願苾芻之戒 仍

不湛烈羯磨秘術之席

強聞者成說戒之障暫退出道場案閑處身

謹莫放逸隨三下之作相環來道場明忍以下之偈可聽聞矣

下之偈可聽聞矣

自恣事

十誦云云何 自恣ナルカ攝衆僧 故善惡相化スルカ 故以罪過テノ

如法清淨故文

夫尼僧依僧 自恣事八敬中其一也佛女人之出家

不許給事者若許女人 出家 正法千年ナルヘキニ 若

度女人 減五百歲ニ能行八敬還復ヘシ千年文

大衆上座並默然不云見罪良由尼內禁三業

外無三事內外清淨並無缺犯各應如法精勤

行道謹慎莫放逸如法自恣文

受日志趣

敬白現前大德衆僧而言 夫以出家慕道

馳散非業 是以律中三時通制之殊夏月

制重故 有三過故也雖然緣事如法時者佛シヤ

聽受日出界仍當寺安居衆中某比丘以三寶

如法緣欲受日出界

〔19オ

方今當寺安居衆之中某比丘以滅罪生善之因緣受一月之法欲出界 抑結夏安居之本制者

濟生利物之嚴制矣 受日出界之軌則者

如來慈愍善巧也 雖然緣事如法之時者

佛受日出界聽給 仍先可成白衆僧一心作法

證明給へ

抑夏月安居之禁忌者三國通禁之佛制矣

受日出界之軌則者如來慈愍之善巧也然

緣事如法時者佛聽受日出家爰當寺安

居衆中某比丘以滅罪生善之因緣受一月

之法欲出界 夫羯磨成否者依衆僧之評量

仍先可成白衆僧一心作法證明給へ

增一經云孝順供養父母功德果報與一生補處

菩薩功德一等文

齋緣記云罽膩吒王墮魚受苦聞鐘停息遣ルニ

告長打 有斯冥感故引阿含 彰其所以 猛心

一往 始終無間為定業 中間微悔ス即不定業則

果相已就 故聖 不免 不定則因勢猶微 故ナルカ

通ニ緣奪ニ若爾罽膩吒王ノ業ハ應不定 答引

業則定故永墮魚中 滿業不定ノ故遇緣停

〔20オ

〔20ウ

〔21オ

息ス罪者先有善因 偶ク然ニ遇フ善ニ打者方

今願 冥ニ通ススモシ 臨ニ此ノ務メ宣ク善ク用心 智興禪師等證

招提寺八所御靈 秘事

公家御日記如此

吉備大臣崇道天王 (崇道天王御子 伊予親王御母 藤原夫人)

藤大夫

橋大夫

文大夫

火雷天神

太宰ノ小貳弘繼

逸勢

文屋田磨

捨芥抄云北野ノ御事也

「21」

天平勝寶七年乙未 鑿真戒法ノ久住地尋三糸伏坂 嘗地味自其名甘述ト

于時文明六年甲午 七月廿一日於招提西二室寫

興福寺僧綱大法師等誠惶誠悲謹言

請被殊蒙天恩裁判北岳ノ邊主僧編シ法相中宗ヲ

講シ權シ權教 以東大寺ノ戒壇ヲ号スル小乘戒ト狂惑不

善事

右北岳ノ邊主ノ僧徒等訴申園城寺ノ住僧等ヲ奏狀

稱 園城寺ノ三ヶノ衆徒等ハ永捨天台圓頓ノ戒ヲ作

稟南都偏小ノ戒ヲ猶号テ天台宗ノ僧ト任座主識ニ應シ

灌頂請ニ昇圓宗等ノ一會ノ講床ニ補スル惣持院ノ

八口阿闍梨ニ乞右謨檢ニ案内ヲ宗別シ權実ニ戒異

金石ニ是以大唐ノ鑿真ハ知時ヲ而筑マ 聲聞ノ小壇於

南都ニ本朝ノ傳教ハ鑑テ機ヲ而弘菩提ノ大戒於天台ニ

「22」

是則遠傳コト 釈迦舍那之金言ヲ近ハ移ス天台

振旦ノ之芳躅ヲ等云々 今中宗ノ學徒見此文ヲ為憤イキトリ

不少先ツ以法相中宗ヲ稱權教之条不可然畧分

又天台圓頓ノ戒南都偏小ノ戒之条先天台圓頓ノ

教ト云事是誰人說哉凡天竺諸國ニ所學ノ

大乘教但有一宗ノミ所謂三論ト与法相也又義淨

三藏ノ云天竺所學大乘無過二種謂ク中觀与方也云々

故知マ天竺ノ諸國ニ全ク不聞天台宗ノ名ヲ況ヤ及裏釈ニ

哉次ニ南都偏小戒之条亦以不知戒壇始生ヲ也

其所次者智度論ニ云ク如弥勒文殊等 以三尺迦佛ニハ

無ニ別菩薩僧 故人聲聞僧ノ中ニ次第而坐ス云々 故

尺迦法中ニ無別ノ菩薩戒壇 只ニ三乘ノ諸子登一戒壇ニ

受テ具足戒ヲ各依自乘ニ修行スルカ故也故戒壇

圖經ニ云祇園精舎ニ有六十五院其中ニ立ツ一ノ戒壇ヲ

謂ク比丘戒壇ト比丘尼戒壇ト也天竺ノ諸國ニ各有リ戒

壇皆造祇洹ノ風ヲ振旦国ノ中ニ有三百余所ノ戒壇

其儀同祇洹ニ云々 今鑿真和尚來テ日本ニ傳戒

律ヲ依テ聖武天皇勅宣ニ移テ招提寺戒壇ヲ立ツ

我朝東大寺ニ所有作法皆移祇洹精舎ノ邊主ノ

僧等恣テ立テ菩薩戒壇ヲ是ヲ謂圓頓ノ戒トシテ何所跡ヲ哉

「23」

况言最澄於叡山可立戒壇之雖言上出家

南京ノ戒壇ヲ和上八代七十年之間不許之最

澄入滅之後至第九代常詮和上之時ニ慇懃ニ

相誘テ始蒙聽許ヲ則乞請テ南都戒壇四角

之土ヲ義真始テ立ツ天台ノ戒壇ヲ是豈非南都ノ

僧徒ノ恩顧ニ哉而應蒙恩顧ヲ是謗三乘ノ具足

戒口稱ス偏小戒ト非唯シ不知具ニ兼テ亦誹謗具足

戒ヲ既是謗此之輩也豈真仏子ナラシヤ哉情以永

代計之ヲ今更違背ス早前ニ所乞清之四角土

可返之ヲ若不返送者七大寺ノ学徒往向北岳ニ

可キ破取之也唐ノ鑒真和尚ハ先ツ從道岸律

師ニ受テ菩薩戒後從天泉寺ノ弘景律師ニ受ク

具足戒ヲ又不空初從金剛智ニ受ク菩薩戒ヲ後ニハ

從南都ニ受ク具足戒ヲ成ヒ苾芻ト云々々加之印度ノ

大論師龍猛提婆等皆從テ諸部ニ出家得度シテ

如ナラ汝等カ僻見ノ者此等ノ論師全可非菩薩ニ歟

又汝等カ先師傳教大師者是大安寺ノ行表和尚

之入室ノ弟子也於興福寺ノ正倉院以仁秀寺主ヲ

為師ト出家得度ス最澄受ク南都偏小ノ戒是

豈非汝等祖師ニ哉又義真圓仁圓珍圓澄

良源是等皆於南京ニ登壇受戒ス此等師者

汝等用メ何僧ト哉若言聲聞僧ナリ者何為天台

座主ト哉若言菩提僧ト者既受ク偏小ノ戒ヲ何云

菩提僧ト重テ思先蹤ヲ彼叡山者是興福寺ノ僧

傳法院ノ杣山也最澄乞請テ始テ結草庵ヲ又

最澄者同寺ノ仁秀寺主之弟子也西塔之サイセウ

延修者東金堂之行ヲ人ト也義真者延修童子糸

牛丸也故知ス延曆寺者是興福寺之根本之

末寺也而邊主ノ僧等忘テ本末ノ礼ヲ褻スルコト於本

寺ト甚奇恠ノ事也必可治罰矣又遠傳ハ尺

迦舍那之金言ヲ近移ト天笠振旦ノ之芳

躅ヲ申条是大狂惑也其所以者釈迦法中ニ

全ク無別ノ菩薩僧故天笠振旦ニ全ニ不立別ニ

菩提戒壇ヲ移ト天笠振旦ノ之芳躅ヲ申条是大ナル

無實也於舍那十戒者自十八梵天下シ至テ

無形二形畜生等ニ得受之此ハ是在家

戒ニ非出家ノ戒ニ不言出家ノ戒ナリト者違涅槃經等ノ

文ニ故傳テ尺迦舍那之金言ヲ不可言立ト菩提ノ

戒壇ハ云々々宗ノ權實等ノ余事畧之

長寛元年四月日興福寺僧綱大法師等

「23」

「23」

「25」

「24」

于時文明六年^{甲午}七月廿五日於二室寫之

興禪院焼失文明八年^{丙申}五月十七日^(マ)牛剋^(ハ)焼出

同沙弥堂類火ニ遇日中ノ行道七仏畧戒之時分火出

應永三年五月七日大地震

佛閣僧坊悉破滅也

「25ウ

都合^ト讀之
一内請事^{着履襪持扇念数}
長老ハ申案内堂達引受者
参ス受者一臆^{ヨリ}一人
ツ、焼香ス焼香了^テ同
時^キ立^テ開^ニ坐具^ヲ上座

三人礼拜^スヘシ以下^ハ不礼

次羯磨阿闍次教授

所^ニ参^ス作法全如先

堂達引導^スヘシ

一次讀^ニ交名^ヲ竟受者同^{堂達教之}

時^ニ立^テ三礼

一羯磨師令請和尚羯

磨不了前堂達教令三礼

了胡跪合掌

又羯磨了同音^ニ各々頂戴^持

乍居一礼

一請羯磨了受者頂戴^持

乍居一礼

一教授師請了受者頂戴^持

折紙一

今日受者

一番 假名

実名 寺号

、 、 、 、

二番

、 、 、 、

已上十八人

堂達讀上之実名^下

此記録書先年傳領一見之處當山重要記録而
無類本珍書也為寺史參考證奉納唐招提寺
經藏禁他出者也 但紙面廿五葉也
明治四十五年^{壬子}夏八月 布薩日識焉
釈子智架 (花押)

「裏紙見返

「上

乍居一礼

一請七證師請了受者頂戴持

乍居一礼

「下

時ニ問訊シテ各開ニ坐具

互脆合掌シテ奉レ待ニ

十師ヲ堂達ハ受者ノ一

臚ヨリ東ニ小北ヘヨリニ西ニ向テ

立ツ教ニ受者ヲ十師道場ノ

縁ノ未申ノ角ヨリ臂折一
ヒチヲツテ

兩人東ヘ望ミ下フ位ニ唱テ

南無諸師ト三礼五躰投地

一十師次第ニ座ニ着キ三礼畢

此位ニ讀受名ヲ□畢テ

受者同時ニ立テ三礼

「上

折紙二

一受者ノ座所礼堂

一受者割截七條ヲ反テ

着之

一堂達柄香口受者ノ

交名トヲ用意ススヘシ

不レ持ニ扇坐具香箱ヲハ

一十師御影堂ヲ出ッ是

時堂達ハ引ニ受者上

前ニ鬘ノ南ノ端ヨリ出マシ

西面ニ列立ス北上座十師

出ニテ、集會所望ニ西室ノ

ラウニ堂達引ニ受者ヲ講

堂ノ南ノ庭ノ講師ノ座ノ前ニ

列立ス東上座受者立

調ラハ、脱レ履ヲ登レ座同

招提寺教朝

現光寺光瑞

別受ノ堂達

スル時是事也

年預沙汰人とも

□執ノ僧ハ廿ハク也

「下